千葉大学大学院人文公共学府 研究プロジェクト報告書 第354集
『ユーラシア諸言語の類型論的記述』(2020): 43-69

ピウスツキ採集のアイヌ語樺太方言民話テキスト
—「カレイ男とカジカ男」—*

阪口　諒

キーワード：アイヌ語、樺太方言、ピウスツキ、トゥイタハ、人称

はじめに

本稿はポーランドの民族学者ブロニスラフ・ピウスツキ（Bronisław Piłsudski, 1866-1918）が採集したアイヌ語樺太方言民話テキストの一つを考察するものである[1]。ピウスツキによるアイヌ語資料は20世紀初頭というかなり早い時期の優れた記録であり、アイヌ語、アイヌ文化の重要な資料となっている。しかしながら、アイヌ語テキストに関しては内容だけでなく、言語的な側面に関する分析が十分になされているとは言い難い。そこで本稿では、ピウスツキ資料の中から魚類が登場する民話テキストを取り上げ、アイヌ語原文並びに内容面にわたる検討を行う。第1節でピウスツキのアイヌ語資料を概観したのち、第2節ではそのうち「カレイ男とカジカ男」という民話を取り上げ、後にカール・エッターによって採集された同じ民話との比較を行うとともに、周辺民族の類話を紹介する。次いで民話に登場するカレイ・カジカに関して、民話に描かれた生態から分かることを述べる。さらに第3節ではアイヌ語の言語的な側面に関して簡単に検討し、第4節で「小カレイ男と小カジカ男」のアイヌ語テキストの音韻表記、形態素分析、日本語訳を提示する。

1. ピウスツキによるアイヌ語資料

樺太方言の質量ともに優れた資料としてドブロトヴォルスキーの『アイヌ語ロシア語辞典』（Dobrotvorskij 1875）があるが、ピウスツキの資料はそれに次いで古く、多くの民話テキストが含まれているという点で特筆に値する。ピウスツキのアイヌ語資料の大部分はPiłsudski (1912), Piłsudski (1990)[2], Pilsudskij (2002), Majewicz (ed.) (2004: 251-417) に見ることができる（Piłsudski 1912以外は遺稿をまとめたもの）。特にPiłsudski (1912) はアルファベット表記のアイヌ語民話テキスト27編とともにピウスツキ自身による英訳・註が含まれており、樺太アイヌの言語文化の基礎資料となっている。これまでにいくつかの日本語訳が出ており、それぞれに原本にない情報が加わっている（知里 1973[1944] やピウスツキ 1983-1992）。

---

* 本稿の第2節はアイヌ民族博物館のWeb雑誌である『月刊シロロ』に掲載された阪口（2018）と重複する。しかし必ずしも読者が重ならず、また前稿が民話に登場するカレイの正体、中に出てくる語彙に焦点を当てながら樺太アイヌの民話全般に関して扱ったものであるのに対し、本稿はテキスト全体をアイヌ語原文に即して民俗的側面だけでなく、言語的側面をも検討するものである。

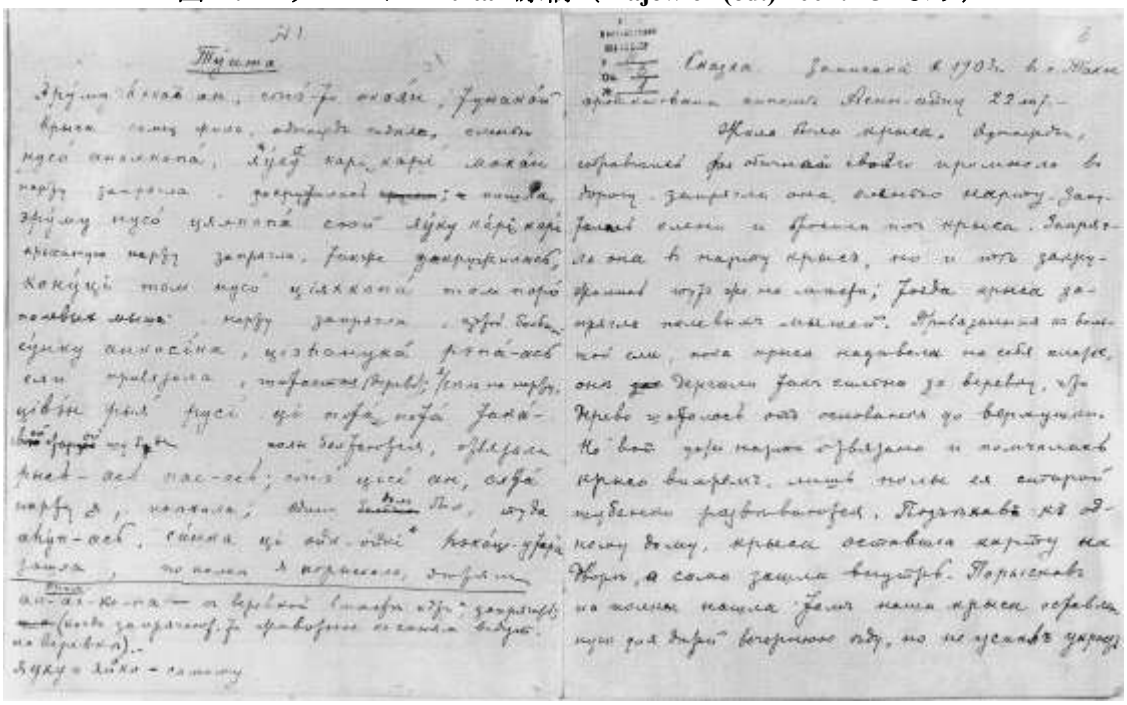
[1] 同じくピウスツキがサハリンで採集したウイルタ語資料に関して津曲（2011; 2014）、Tsumagari (2014) が検討を加えている。本稿をまとめるにあたって、形式、凡例など大いに参考にさせていただいた。

[2] これを基に村崎（2001）がアイヌ語テキスト全編の音韻表記と日本語訳を行っている（ただし註は翻訳されていない）。それに対し、本稿はPilsudskij (2002) に掲載されているキリル文字表記のアイヌ語テキストを分析し、形態素分析とともに、新たに音韻表記と日本語訳を行うものである。

ピウスツキの死後、未公刊のままであったアイヌ語資料は Piłsudski (1990), Majewicz (ed.) (2004) によって公刊された。キリル文字によるアイヌ語テキスト、ロシア語による逐語訳がそれぞれ、ローマ字テキスト、英語による逐語訳に置き換えられている。さらに、ピウスツキによる民話の（逐語訳ではない）ロシア語訳を現代の正書法に置き換えたものが収録されている（ここまで Piłsudski 1990 と Majewicz (ed.) 2004 で同様である。Majewicz (ed.) 2004: 255 の記述によればこの作業は Aleksandr M. Kabanov が担当）。そして、Majewicz (ed.)（2004）ではアイヌ語から直接に行った英訳と、ピウスツキによるロシア語訳の英訳が新たに加わっている（これは Majewicz による）。なお、キリル文字によるオリジナルの記録は、Pilsudskij (2002) で公刊されている。

ピウスツキの著作集（Majewicz (ed.) 2004）において、新たな英訳 2 つが加わったことは喜ばしいことだが、Pilsudskij (2002) と比べて註がいくつか欠けているなど、問題点もある。なお、Piłsudski (1990), Majewicz (ed.) (2004) にはもとになったノートの写真が数ページ分掲載されているが（図 1 参照）、本稿が対象とする「カレイ男とカジカ男」（Tuita 3[3]）のものはない。そのため、本稿の第 4 節で提示するテキストは、アクセントがきちんと付加されており、最も原表記に近いと思われる Pilsudskij (2002) のインターネット版[4]に基づいている（書籍版では 3 行目からアクセントが表記されていない）。

図 1：ピウスツキの Tuita1 原稿（Majewicz (ed.) 2004: 257 より）



[3] Tuita は次章で説明するように、物語のジャンル名称である。

[4] 2020 年 2 月 15 日現在、インターネットでも閲覧することができる（http://panda.bg.univ.gda.pl/ICRAP/en/Folklor_sachalinskich_Ainov.html）。

2. 民話「カレイ男とカジカ男」の内容分析

2. 1. 物語のジャンルに関して

ピウスツキは本テキストを Туита (Tuita)（トゥイタハ[5]、樺太アイヌの口承文芸のジャンルで「昔話、おとぎ話」）と記している。後述するカール・エッター[6]が採録したバージョンにはジャンルは書かれていない。以下では、ピウスツキが採録したバージョンをピウスツキ版、エッターが採録したバージョンをエッター版とする。

トゥイタ(ハ) tuytah は、「比較的形式が決まっている昔話。主人公の名前は男はホロケイポ（horokeypo）、女はモニマハポ（monimahpo）で、たいてい兄弟三人が登場する。舞台になるのはサンヌピシ村（Sannupis）。伝統ある昔話で、語り口、筋なども原則的には定型がある。現実には存在しないウンカヨオヤシ（ウンカヨお化け）や動物に化けた神様などが良く登場する、架空のお話。語りの間に、節のついた、韻をふんだ歌がはさまれることがおおい」（村崎 1989: 5-6, 一部表記を変更）ものだという。ただ、村崎氏の解説で指摘されているような挿入歌は本稿で取り上げる Tuita 3 では当たらない。挿入歌のないトゥイタハは動物同士の話や、器物や自然の素材が主人公となる話だと丹菊（2002: 42）が指摘している。

なお、アイヌの民話において動物が登場することは珍しくないが、そのうち魚類が登場するものはそれほど多くない。樺太アイヌの民話に限定すれば、tukusis（アメマス）が唇の周りに刺青を入れて美しい莫蓙を織る女性として登場する短編の存在が Ohnuki-Tierney (1974: 28) で報告されているだけである。これ以外に、人格を持った魚類が登場するものを筆者は確認できていない[7]。樺太に関しては、口承文芸そのものの採録数が多いとは言えないため、魚類が登場する民話が一般的でないと結論付けることは難しい。しかし、北海道・樺太のどちらにおいても魚自体が人格を持ったものではなく、魚を下す神様[8]によって下される存在であり、一匹一匹の魚が人格を有するという意識が希薄だったと思われる。そのため、魚類が登場する民話がほとんどないのではないかと考えられる。

---

[5] ピウスツキはトゥイタ Tuita と表記しているが、ピウスツキ以後の記録では「ツイタハ」（知里 1973[1944]: 344）や「トゥイタハtuytah」（村崎 1989: 5）のように記録されている。Piłsudski (1912) をはじめとしたピウスツキの記録には存在すると想定される語末の h 音が書かれていないことが多い。ピウスツキの少し後に東海岸南部を訪れた金田一京助は、富内（トンナイチャ）・落帆（オチョボッカ）の言葉をもとに「樺太アイヌの音韻組織」をまとめているが、語末の h に関して「h 音が屡々語の終る時には聞えないがちなれど、語或は音（但子音）が続く時には明瞭に聞える」（金田一 1911b: 472）と記している。以下では、混乱を防ぐため、トゥイタハと表記する。

[6] Etter (1949) の書評として Kitagawa (1950) がある。阪口（2019b）でも Etter (1949) 中の民話を扱っており、エッターに関して若干触れている。

[7] Ohnuki-Tierney (1974: 26) に、ある人がガンギエイ（カスベ）skate と性的関係を持った結果、美しい男の子が生まれ、何年もの後、人間の父親を訪問したという伝説が記されているが、カスベ自体は人格を持っていないようである。なおこのタイプの話は「エイ女房」譚として広く知られている（田畑 1995）。

[8] 北海道ではチェパッテカムイ cepattekamuy と呼ばれることが多い。樺太では、チェペヘテカムイ cepehtekamuy と呼ばれる。チェペヘテカムイの物語としては、浅井（口述）・村崎（編訳）（2001: 112-117）がある。大貫（1979: 120）によれば、チェペヘテカムイは、魚やその他の海産物の製造主と考えられており、人間の前に現れる時にはアザラシになるという。

2. 2. エッター版との比較

この節ではピウスツキ版とエッター版の比較を行う。ピウスツキ版のあらすじは以下の通りである。この物語は多古恵 Takoye でクスリコヤ Kusurikoya という 19 歳の少女によって語られたものである。

ピウスツキ版：「小カレイ男と小カジカ男」

小カレイ男と小カジカ男がいた。カレイ男は沖の国のカカン[9]（太守）の娘がとても美しいと聞いたので結婚したくて沖の国に行った。娘が塩くみに浜の方に下りてきた。（以下カレイの自叙）私は柄杓の中に入りこんでカカンの家に帰った。娘は私を非常に気に入った。しかしカカンはカレイ男を良く思わなかった。（以下 3 人称叙述）ある日、家の外に男が来たのでカレイ男は一緒に薪取りに行った。クマに出会ってカレイ男はクマの口に投げられた。カレイ男はトゲで胃袋を刺して殺して帰った。カレイ男とカカンの娘は結婚して、クマの肉を料理して親戚を招いたが、来なかった。カレイ男は妻となったカカンの娘を連れて村に帰った。男の仕事、女の仕事を子どもに語り伝えた。小カジカ男の妻は女の子に語り伝えた。彼等が亡くなった後、子供たちはみんな幸せに暮らした。

（Pilsudskij 2002: 16-20）

この話は C・エッターが 1930 年代に別の話者[10]から採録した一篇と大筋において一致する。以下に該当箇所の日本語訳を掲載する。タイトルはエッターによるものの日本語訳である。なお、エッターの英訳は中盤部分が省略されている。

エッター版：「競争で若者を負かして美しい娘と結婚する権利を勝ち取った神様」

樺太のある村に美しい娘が住んでいた。遠くの若者も近くの若者もその娘と結婚したくて宝物を持ってきたので宝物が山のように積みあがっていた。カレイの神様は（娘の結婚相手を決めるための？）闘技場に入った。そして娘が水を汲みに川に下りてきたときに、カレイの神様は柄杓の中に飛び込んだ。娘がカレイをひろって、強く抱きしめると、カレイはハンサムな青年に変わり、そして彼女の胸にぴったりくっついた。（結末部分まで飛ぶ）父親は、娘と結婚したがっている青年たちに「村を悩ませている 2 頭のクマを殺すことができた者に娘をやろう」と言った。青年らはクマに出会うと、不安

---

[9] もともとは内陸アジアのトルコ・モンゴル系の遊牧民を中心にユーラシアの諸地域で広く使われた言葉で、君主の称号である。ハーン、ハガン、カン、カガン、カーン、カアンとも言う（西川ほか(編) 2001: 756）。

[10] この話者が誰なのかは不明だが、エッターはトウナイ（富内）のナイトー・カイチロウ（23; 107）、シラハマ（白浜）のナイトー・ソーキチ（内藤宗吉）（175）、タラントナリ（~トランタワリ）（多蘭泊？）でイシカワ・イキ（82-84）から物語を聞き取っているので、このうちの誰かではないかと思われる。エッターの資料に関しては Guide to the Carl Etter papers and Ainu Folklore and Culture 1931-1932, 1949（https://anthropology.si.edu/naa/fa/etter.pdf）に原稿と写真資料の内容が紹介されているが（2020 年 2 月 11 日現在、閲覧不可となっている）、その中にこの物語とタイトルが一致するものは見当たらない。

で逃げだした。しかしカレイの神様はクマの口に飛び込み、ヒレで腹を切って、お尻から出た。そうして２頭のクマを倒した。カレイの神様はクマを殺して帰り、ハンサムな青年の姿となって娘の父親の家を訪れた。父親はカレイの神様に娘を与え、娘とカレイの神様は夫婦として幸せに暮らした。

（Etter 1949: 84）

以下に、エッター採録のテキスト（Etter 1949: 84）と比較しながら、両者の内容・表現等の相違点と一致点を一覧表にして示す（表 1 参照）。ただし、エッターのテキストは原文（おそらく日本語）はなく、英訳も梗概のみである。存在の確認できない箇所を除けば、大筋において一致しているが、カジカが登場するか否か、結末のカレイがそのままの姿か人間に姿になるかという点に関しては語りに違いが見られる。

表 1: ピウスツキ版とエッター版の比較

ピウスツキ版	エッター版
1903 年タコエ（多古恵）のクスリコヤ（Kusurikoya）という 19 歳の女性から採集	1932 年に（？）樺太で採集
tuita とジャンルを明記	ジャンルの記載なし
小カレイ男と小カジカ男が登場	カレイ男のみ登場
結婚するため沖の国の娘の元へ行く	樺太のある村の美しい娘を求めにいく
娘が潮を汲みに浜に来る	娘が水を汲みに川に来る
カレイが娘の柄杓に飛び込む	
（該当する記述なし）	娘がを抱きしめるとカレイは美男子になる
娘はカレイを気に入る	
カカン（娘の父）は結婚を認めない	父親は求婚者たちに難題を出す
ある日、男が来てカレイを連れ出す	（該当する記述なし）
カレイがクマの口に投げ入れられる。	カレイがクマの口に飛び込む。
カレイはトゲを使ってクマを退治	カレイはヒレを使って 2 頭のクマを退治
カレイの姿のままで娘の父親のもとへ	カレイは美男子の姿で娘の父親のもとへ
カカン（父親）と和解していない（？）	父親は娘をやることをカレイに承諾
カレイと娘は夫婦となって幸せに暮らす	

2. 3. 周辺民族の類話

この話の類話は隣接するニヴフにもみられる。言語学者の服部健氏のノート（北海道北方民族博物館収蔵）にこの物語とよく似たニヴフの伝承が記録されている。筆者は原ノートを実見していないが、丹菊（2013）に以下のようにそのあらすじが掲載されているので、以下

に転載する。

（ニヴフ・東海岸ポロナイスク）ある女の子が川に遊びに行くと美しいカレイがいたので捕まえて帰る。母親に怒られて戻しに行く。途中で草小屋に泊まった。夜明け頃三人の男が現れカレイを奪う。男たちはカレイを木の洞に閉じ込める。カレイは木を切り薪を作って逃げ出し草小屋の女の子の元へ戻る。夜になるとまた三人の男が現れカレイを奪い、出会ったクマの口の中に投げ込む。カレイは棘でクマを殺し腹を裂いて出た。クマ肉と皮を女の子の元へ持って帰る。カレイは人間の男に変身し女の子と結婚する。両親の元へ帰る。両親は謝罪した。［服部ノート 整理番号 T396・53］

（丹菊 2013: 64）

2.2 で見た樺太アイヌの民話とかなり似ているが、このニヴフの物語にはカレイが娘に求婚するというモチーフが見られない。しかし、水辺でカレイを発見するというモチーフ、最後にカレイが娘と結婚するというのも共通している（ピウスツキ版でのみカレイが人間に変身したことが語られていない）。また、クマの体内に入ったカレイがクマを殺すというのも 3 編共に共通している。丹菊（2013: 58）は、ピウスツキ版と服部健氏採録のニヴフの物語に関して「ニヴフの伝承ではカレイを虐待する『三人の男』の正体が語られずじまいである。アイヌの伝承では『三人の男』は登場しないが、やはり『一緒に旅だったカジカ』についてそれきり語られずじまいになっている。両方の伝承が不完全だということからは、ともに本来の伝承から何か脱落している可能性が考えられる」と指摘している。もともとはアイヌやニヴフの伝承ではなく、他地域・集団から伝わった可能性も考えられる。ピウスツキ版では話の舞台が沖の国であるが、このこともこの民話の来歴と関係しているかもしれない。

2. 4. カレイ・カジカが同時に登場する理由

ピウスツキ版の冒頭部にはカレイとカジカが登場する。漁撈がかなりの比重を占める樺太アイヌはカレイやカジカのことを当然よく知っていたはずであり[11]、それらの特徴から大きく外れるものが民話として伝えられるというのは考えにくい。たとえ元の伝承から変わっていたとしても、カレイ（とカジカ）の話として認識していたと考えられる。ピウスツキ版において、カレイとカジカは海にいる設定である。カレイは結婚相手を求めて沖の国へ泳いで（？）行く。冒頭部でカレイとカジカが同時に登場するのは、おそらく漁期が重なる魚類だからと考えられる。樺太では、「5 月、6 月には海上へ丸木舟を出して杜父魚（ソㅎカナ soxkana）や鰈（カパリユ kapariŭ）を釣る。これは骨針（ポニ アハ poniax）で釣る。胴（アハ ホン axhon）は鯨の骨（フンペ ポニ humpe poni）で作り、その下部へ針を曲げて吊し、

[11] Ohnuki-Tierney (1974: 28) には子供でさえ魚の行動をよく知っているとある。子供の食べ過ぎを大人が叱るときにも、カジカ sculpin のように胃が破裂してしまう（カジカが hacuhceh「シシャモ」を食べすぎて死ぬことがある）と言うことがあるという。

胴の上部には釣糸をつける。漁獲すれば随時、食用にした」（知里・山本 1973: 184）とあるようにカレイとカジカは同じ時期にとれる魚のようである[12]。しかし、カジカは冒頭部で語られた後、忽然と姿を消し、沖の国へ向かってはいないようである。物語の終わりにはカジカ男本人ではなく、その妻が突如として現れる。この非常に不可解な点もやはりカジカの生態と関係があるかもしれない。というのも、カレイは海と川の両方に生息しているが、カジカは海と川を行き来できないからである[13]。カジカ男は民話の冒頭でしか語られず、カレイ男が沖の国から自分の故郷へ帰る終結部分にいたってようやくその妻が登場する。これには海でしか生活できず、人間の居住空間の近くで人間と遭遇するチャンスのないことが反映されているといって良いのではないだろうか。ただ、カジカ男の妻が登場するのみで、カジカ男本人が行方をくらましている理由は依然として謎のままである。カジカ男の妻にしても、女のすべきことを女の子に語り伝えた[14]というような常套的な表現を語る場面で思い出したように語られだけである。エッター版やニヴフの伝承ではカジカは登場していないので、ピウスツキ版のような語りは、漁期が同じだったカジカが、カレイの伝承に後から付け加えられたことを示しているのかもしれない。

その他カレイとカジカに共通する点として、骨が危険だということがある。ピウスツキ版アイヌ語テキストの Óхкари понинэ (ohkari ponihe) という語彙に「胃や腸を傷めることがあるため、犬にさえ与えることが許されていない骨である。危険なのはカレイとカジカ、コイの一種の骨だけである」（Pilsudskij 2002: 19）という註が付けられている。

2. 5. カレイの正体

ピウスツキ版に出てくるカレイは、カレイなので沖の国まで泳いで行ったと考えるのが自然である。カレイは沖の国に到着すると、潮くみに下りてきたカカンの娘の柄杓の中に入る。エッター版だと娘は川に水汲みに下りてくる。ピウスツキ版では娘は浜で海水を汲んだようだが、エッター版では川で水を汲んでいる。ここでなぜ川なのかという問題が出てくるが、この問題には、カレイの中に海水と淡水の両方で生活できるものがいることが関係しているのではないかと思われる。海水と淡水の両方で生活でき、サハリンにも分布しているものにヌマガレイ（*Platichthys stellatus* (Pallas)）とイシガレイ（*Platichthys bicoloratus* (Basilewsky)）がいる。この物語に登場するカレイもこのどちらかである可能性が高い。ヌマガレイ（北海道あたりではカワガレイとも）にはイボ状のザラザラした鱗があり、イシガレイには目のある側に不規則に並んだ石のような骨板がある。かつて樺太東海岸の白浜に住んでいた T・A

[12] 知里・山本（1973: 156）に掲載の樺太アイヌの生活暦においても、カジカとカレイは一つにまとめられており、他の魚類とは漁期が重なりはしても一致していないことが確認できる。
[13] 『分類アイヌ語辞典 動物篇』（知里 1976[1954]: 18-20）では川にいるカジカがソホカナ sohkana となっていたが、上に引用した知里・山本（1973: 151; 184）からもソホカナ sohkana が海のカジカもさすことが分かる。海にすむカジカは海で一生を終えるのだと思われる。
[14] こうした語り方に関して知里真志保氏は「アイヌの血族に於ては、男系と女系とを区別してゐて、男の血統は男子に伝はり、女の血統は女子に伝はると考えている。従つて教育なども、男子には男親が授け、女子には女親が授けるのである」（知里 1973[1944]: 364）と記述している。

氏は、川尻の浅瀬でカジカやカワガレイを手掴みしてとったという思い出を語っているが、親の見よう見まねでカワガレイの鱗を取って自分で食べていたところ、ザラザラした石を身と一緒に口に入れていたため、すっかり口の中が傷だらけになり、水を飲むこともできなくなったという（北海道教育庁生涯学習部文化課編 2003: 27-28）。この語りにあるように、カワガレイ（ヌマガレイ）は川尻の浅瀬で捕まえられるようであり、水を汲みに来た娘と出会うという物語の描写とも整合する。

以上のように、ピウスツキ版の語りに登場するカレイは、その特徴から判断してヌマガレイかイシガレイだと思われるが、クマを殺害した凶器 ohkari ponihe「尾のところにあるトゲ（骨）」（第 4 節テキスト 22 行目）との繋がりを考えるなら、イシガレイがふさわしいのではないかと思われる。イシガレイには目のある側に不規則に並んだ石のような骨板があるだけでなく、「しりびれに鋭い前向きのとげが 1 本ある」（多紀ほか 2005: 920）からである。

3. アイヌ語テキスト分析

3. 1. 物語の人称に関して

なお、エッター版に原文はなく、英訳も三人称叙述で通されているが、アイヌ語テキストが残されているピウスツキ版では三人称で始まり、カレイの自叙に代わり、最後にまた三人称に戻るという人称の変化が確認できる。この特徴は樺太方言で語られた民話に比較的よく見られるもので（Pilsudskij 2002 の Tuita 2, 11 と類似している）、一種の語りの技法だと考えられる[15]。当然のことながら、樺太内部でも地域差があると想定されるが、実際に Pilsudskij (2002) に収録されているトゥイタハからは人称の地域差が確認できる。丹菊（2002: 41）ではトゥイタハに一人称形式のものと三人称形式のものがあると指摘されているが、一人称と一括りに扱われているものの中にも違いが見られる。表 2 に示したように、樺太東海岸方言では一人称が AN 系、KU 系、CI 系という 3 つのクラスに分けられる（いずれも一人称単数を意味する。KU 系, CI 系は一人称単数のみを表すが、AN 系は一人称複数をも表す）。

表 2: 樺太東海岸方言における一人称のクラス

人称代名詞	自動詞主格	他動詞主格	他動詞目的格	略称
kuani	ku-	ku-	in-	KU 系
ciokay~cookay	-as	ci-		CI 系
anokay	-an	an-	i-	AN 系

（Sato 1985, 阪口 2019a をもとに作成）

[15] この現象に関して知里（1973[1944]: 317）は「本格的なアイヌ説話は総べて『俺が……俺が……』と第一人称説述体をとるので、三人称説述体で出来した説話も、うっかりすると途中で一人称説述体になりたがる傾向が樺太にはある」と述べ、これが「壊滅一歩手前に於ける樺太アイヌの説話における現状」（知里 1953: 208）であると否定的にとらえている。北海道のものでも、冒頭が三人称で、途中一人称に切り替わり、ところどころ三人称に戻るものがある（虎尾 (伝承)・志賀 (解題) 1988）。また、『蝦夷方言藻汐草』の末尾の「ユーガリ」は三人称で語り始め途中から一人称になっている（浅井 1972: 133-134）。

地域差を確認するため、以下に Pilsudskij (2002) 収録の Tuita 11 話の人称を北から順に配列した（表 3）。①～⑪のうち、AN は全てで確認できるが、KU, CI の用いられ方には違いがある。KU 系が確認できるのは⑥⑧⑪のみで、引用の中でのみ KU 系が用いられている。CI 系が確認できるものは①②④⑤⑩で、①②④⑩は引用のみに現れるが、⑤の場合は地の文にも用いられている。KU 系と CI 系の使用に関しては、例が少なく地域差を確認することは困難であるが、地の文で三人称を使用するかと否かに関しては比較的はっきりした地域差が見いだせる。⑥～⑩（富内・落帆）は地の文が AN でのみ語られているているが（ただし富内の⑪では途中三人称に切り替わる部分がある）、多古恵から北は AN と三人称が混在すると言える。なお、西海岸北部のトゥイタハ（浅井 (口述)・村崎 (編訳) 2001）はすべて三人称で語られる（引用中には CI, KU が見られる）。

表 3: Pilsudskij (2002) 収録のトゥイタハで用いられる人称の差異[16]

番号	表題	語り手	採集地	地の文	引用文
①	Tuita 2	Sukoyamma[17]	Siraroko（白浦）	3→AN→3	CI, AN
②	Tuita 11	Usarosma[18]	Otosan（小田寒）	3→AN→3	CI, AN
③	Tuita 3	Kusurikoya[19]	Takoye（多古恵）	3→AN→3	AN
④	Tuita 10	Tehkantuki	Takoye（多古恵）	AN→3→AN	CI, AN
⑤	Tuita 1	Asin-aynu	Takoye（多古恵）	AN→CI→AN	AN
⑥	Tuita 4	Kutokere[20]	Ocohpoka（落帆）	AN のみ	KU
⑦	Tuita 7	Kutokere	Ocehpoka（落帆）	AN のみ	なし
⑧	Tuita 5	Ramante[21]	Tunayci（富内）	AN のみ	KU, AN
⑨	Tuita 6	Nupausemma	Tunayci（富内）	AN のみ	AN (in-が 1 例)
⑩	Tuita 9	Nupausemma	Tunayci（富内）	AN のみ	CI, AN
⑪	Tuita 8	Porosamma[22]	Tunayci（富内）	AN→3→AN	KU, AN

※地の文の列にある 3 は三人称を表す。落帆は Ocohpoka, Ocehpoka に二通りの表記がある。

[16] Pilsudskij (2002) の語り手、出身地をアイヌ語の音韻に合わせてローマ字表記したため、キリル文字のローマ字転写とは異なっている。
[17] スーコヤンマは春日チヨのことである。服部・知里（1960）にも白浦の話者として協力している。
[18] 木村ウサルシマ氏だと思われるが、木村氏は相浜出身で後に白浜に住んでいたのであり、小田寒にいたのかは不明である。Usarosma 氏は 1903 年時点で 20 歳とある。木村氏は 1953 年に 71 歳（数え年か）で亡くなった（北海道教育庁生涯学習部文化課 (編) 2003: 33）ので、年齢もほとんど一致する。
[19] ピウスツキ（2018: 257）にも名前が見える。
[20] ピウスツキによる 1904 年の家族調査の際、オチョホポカ村で「コトケレ」（田村 2015: 237）とある人物と同一人物であろう。35 歳の男性とあるので年齢もおおよそ一致する。Tuita 7 の語り手でもある。
[21] ラマンテは『北蝦夷古謡遺篇』（金田一 (編) 1914）の伝承者としてよく知られている。日本名は東内忠蔵。Piłsudski (1912) 第 11 話の語り手でもある。山邊 (著)・金田一 (編)（1913）にも登場する。
[22] 同じく Tunayci に住んでいた Yorusamma（内藤ヨル(~ロ)サンマ）であるかもしれない。Piłsudski (1912: 172) によれば 1903 年 5 月の時点で 43 歳とあり、年齢が一致している。

3. 2. 複数標識 AHCI[23]

ここでは、テキスト内に見られる複数標識 AHCI について解釈を試みる。一般に複数標識 AHCI は次の例 1 のように動作主の数に一致する（ここでは復元した音韻表記だけを示す）。

(1) Pon kapariw ohkayo pon sohkana ohkayo u-tura okay-**ahci.**
small flatfish man small sculpin man REC-together.with live.PL-AHCI
「小カレイ男と小カジカ男が一緒に暮らしていた。」（第 4 節 1 行目）

しかし、本話にはそれで解釈できない例が 2 例出現する（そのうち 1 例は註 29 を参照のこと）。次の例 2 は動作主がある青年 (horkewpo) がクマの口に向かってカレイ男を投げる場面のものである。

(2) pon kapariw ohkayo iso cara onne ocipa-**si**.
small flatfish man bear mouth(POSS) place.to throw-AHCI
「小カレイ男はクマの口に向かって投げられた。」（第 4 節 21 行目）

日本語訳は受身文にしたが、「青年が小カレイ男を投げた」と解釈することも可能である。しかし、ocipa「～を投げる」に複数標識 AHCI が付加されている理由が明らかではない。この例と同じように動作主、被動作主の数に一致しない例は他の資料にも散見される。村崎（1979: 51）は、主語が不定の三人称単数である時にも AHCI が用いられると指摘し、次のような例を挙げている。

(3) taa cise ohta i-ama-**hci** anah pirika kusuneya.
that house place.at 1.O-put-AHCI if be.good FIN
「あの家に私をおいてくれたらなあ」（村崎 1979: 51, 和訳は原典による）

(4) an-oyra-pe-he an-hunara kusu paye-an-ihi neyah
1.S-forget-NMLZ-POSS 1.S-search for go.PL-1.S-NMLZ TOP
naata ka uk-**ahci** wa isam.
who even take-AHCI and not.exict
「忘れ物を探しに行ったところが取られてなくなっていた。」
（村崎 1979: 51, 和訳は原典による）

[23] 子音で終わる動詞の後ろでは ahci、短母音で終わる動詞の後ろでは hci という語形になる。そして長母音の後では ci となる（知里 1973[1942]: 497）。以下では AHCI でこの標識を代表させる（これは中川裕先生の示唆による）。AHCI は特定の人称に呼応するものではなく、独立性が高い人称接尾辞（接語）-an のさらに後ろに出現するため、助動詞と考えて差支えないと考えられる（テキスト部分では便宜上-AHCI とする）。なお、Piłsudski (1912) から、南部に行くほど AHSI という語形になることが確認できる。

特に例文 4 の uk-ahci にあたる部分の日本語訳が「取られ」というように受身となっていることは注目に値する。例 2 と合わせて AHCI が受身文の標識であると考えても良いように思われる。ただ、次の例 5〜7 では AHCI が受身の標識としても用いられる不定の人称接辞 AN（3.1 参照）とともに用いられているため、これでは十分に説明することができない。なお、次の例 5〜7 で動作主は単数でかつ定である。

(5) Tan poro nispa too-po paa ta suntehkew-he
this big gentleman lake-DIM upper.part at remain-POSS
an-ociwe-**hci** ruuhe an.
IND.S-throw-AHCI COMP exist.SG
「その大きな長者は（湖にいる魔性のイワナに殺されて）湖の上手にその死体を投げ飛ばされたのだった。」（Piłsudski 1912: 235）

(6) mosiri-kamuy ohta onkami an-kii-re-**hsi**
country-god place.at worship IND.S-do-CAUS-AHCI
「（知古美郎は）天皇陛下に拝謁仰付かり」
（山邊著・金田一編 1913: 2, 和訳は原典による。（）内は筆者が追加）

また、次の例 7 のように心理的影響を表すものまで存在する。

(7) Nagayama nah ay(<an)-yee tono neanpe
Nagayama QUOT IND.S-call load TOP
poro paase tono orowano teekoro an-ramu-**hsi**
big heavy load from very.much IND.S-like-AHCI
「永山大佐は、西郷侯爵にすっかり気に入られて」
（山邊著・金田一編 1913: 27, 和訳は原典による。（）内は筆者が追加）

以上の例 2〜7 に共通することは動作主と被動作主のどちらも単数であることである。村崎（1979: 51）は主語が不定の三人称であるという指摘しているが、例 2 の主語は動作主と一致し、定の三人称単数である。例 3〜7 は、動詞自体は三人称、または AN 系人称であるが、やはり動作主は定の三人称単数である。そのため、AHCI が受身文の形成に関わっている可能性が考えられる。特に例 2 では誰が動作主であるか明らかで、かつ受身文の典型的な標識である人称接辞 AN が用いられていないため、（通常は人称接辞 AN と共に用いられる必要はあるが）AHCI が受身の標識の 1 つとして機能していると考えてもよいのではないだろうか。

以上、簡単に動作主の複数を表すと考えられない複数標識 AHCI について簡単に触れ、受

身文の形成に関わる可能性を指摘した。しかし、樺太方言においては受身文そのものに不明な点が多く存在するため[24]、複数標識 AHCI と受身文の関係の追及には依然として多くの問題が残されている。この点の追及は今後の課題としたい。

4.「カレイ男とカジカ男」全文

4. 1. 凡例

ピウスツキによるこの民話テキスト全体の復元と解釈を行う。以下で分析の対象とするのは、ロシア語版の Pilsudskij (2002) に掲載のテキストであり、39 行[25]の完結した一話である。できる限り原資料に近づけるため、1 行目は Pilsudskij (2002) のインターネット版[26]をローマ字に転写することなくキリル文字のまま掲載する。書籍版を用いないのは、インターネット版ではアクセント表記がなされているためである。ただし、誤植と思われる個所は書籍版の Pilsudskij (2002) や Piłsudski (1990), Majewicz (ed.) (2004) で確認して訂正した。また、いくつかの翻刻の時点でのミスと思われるものが散見されるが（н (n) と п (p) の誤植が多い）、そのまま掲載し註で指摘した。Piłsudski (1990), Majewicz (ed.) (2004) との異同も気づいた限り註で指摘した。以下では意味的に切れるところを一行として、あらたに行区分をほどこした（本稿での行番号の後に/で区切って、原ノートの対応する行を斜字体で示した）。

2 行目に掲載の音韻表記は服部（編）（1964）の方式に従ったが、声門閉鎖音は表記を省略した。また、ピウスツキは母音の長短をほとんど区別していないが（長母音が想定されるところで、アクセント記号が付加されていることがよくある）、後続する複数標識の語形や、発音変化の規則などの点から母音の長短を区別しなければ理解しにくいところがあるため、長母音の復元を行っている。表記や分析の不明な個所は(?)で示した。また、他のピウスツキ採集テキストにもみられることだが、名詞に所有接尾辞が付加され所属形となる際、母音があるべき場所にない事例が多々ある。あると想定される母音がないのは、その母音が無声化しているために、ピウスツキが筆記していないということなのだと思われる。このように原文にはないがあるべきと想定されるものは[ ]で補い、原文にあるが必要ないと判断できるものは( )で括った（例：repun nike→repun (n)ike）。更に、本稿の冒頭でも指摘したが、語末の h が表記されていないことが多い。あると想定されるものは、[]で括って補充した。

音韻表記した語形には可能な限り形態素の区切りを付し、3 行目にそれに対応するグロスを示した。いくつかの語彙は類例が見つからず？を付けざるを得なかった箇所がある。

4 行目に、アイヌ語からの日本語訳を掲載する。不明箇所がいくつか残ったままである。今後、資料の掘り起しによって明らかになることを願っている。

---

[24] すでに荻原 (解説)・丹菊 (翻刻･訳註)（2001: 199）が「いわゆる受動体(ママ)が 4 人称（註―本稿で言う AN 系人称）でなく、3 人称でつくられているのか」という指摘を行っているように、樺太方言では三人称の受身文と言えるものが多数見られる。

[25] Majewicz (ed.) (2004: 286-287）の行区分では 37 行となっている

[26] 註 4 参照。

4. 2. テキスト

1/*1*

Пон-	капа́риу-	о́хкаё	пой	со́ккан-	о́хкаё	уту́р	окаяхци́.
Pon	**kapariw**	**ohkayo**	**poy(<pon)**	**sohkan[a]**	**ohkayo**	**u-tur[a]**	**okay-ahci.**
small	flatfish	man	small	sculpin	man	REC-together.with	live.PL-PL

小カレイ男と小カジカ男が一緒に暮らしていた。

2/*2*

Пон	капа́ри	о́хкаё:	"Репу́н	моси́ри	о́ннэ	ма́хну	кусу"	нах-	е.
Pon	**kapari[w]**	**ohkayo**	**“Rep-un**	**mosiri**	**onne**	**mah-nuu**	**kusu. ”**	**nah**	**yee.**
small	flatfish	man	sea-exist	country	place.to	wife-take	will	QUOT	say

小カレイ男は「沖の国へ妻を探しに行く」と言った。

3/*3*

Рэпу́н	моси́ри	о́ннэ	рэпу́н,	рэпу́м-	мосисьта,		рэпунникé	
Rep-un	**mosiri**	**onne**	**rep-un.**	**rep-un**	**mosis[27]**	**ta**	**rep-un**	**(n)ike**
open.sea-exist	country	place.to	sea-go.to	sea-exist	country	to	sea-go.to	and

沖の国へ行った。沖の国に行って

4/*4*

Кака́н[1]	махпо́ho	тэ́ коро	пи́рика	мо́ромахпо	нэ	ману́;
kakan	**mahpoo-ho**	**teekoro**	**pirika**	**moromahpo**	**nee**	**manu**
governer	daughter-POSS	very	beautiful	woman	COP	HS

カカンの娘が非常に美しい娘だという

5/*5*

наха	нуhу	кусу́,	сам	тусу́и[28]	кусу́	рэпу́н.
nah(a)	**nuu-hu**	**kusu,**	**sam**	**rusuy**	**kusu**	**rep-un.**
QUOT	hear-NMLZ	because	marry	DESID	because	sea-go.to

ことを聞いたので、結婚したくて沖の国に行った。

---

[27] mosih は mosiri と共に北海道方言の mosir に対応する（語末の h は i の後で s に近く発音される）。
[28] 英語版では rusúi。t, r のどちらで表記されていても r で表記される音であることに変わりはない。樺太方言の[t], [d]に近い音で発音される r の発音に関しては金田一（1911a: 408-410）に詳しい。

6/*5-6*

Кака́н	ма́хтуи	кисѝ	сѝсьпо-та	кусу́	сан,
kakan	**mahtuy**	**kii-si**	**sis-po-taa**	**kusu**	**san,**
governer	wife-reject(?)	do-PL	seawater-DIM-scoop	in.order.to	come.down

カカンは（娘への）求婚を断った（？）[29]。娘が塩くみに下りてきた。

7/*6*

ка́хкумhи	о́ннайкета́		ahу́п-ан
kahkum-[i]hi	**onnay-ke**	**ta**	**ahup-an.**
dipper-POSS	inside-place	at	enter.PL-1.S

私は柄杓の中に入った。（ここからカレイの自叙）

8/*7*

цисе́	охта́	макапа́н,
cise	**ohta**	**makap-an.**
house	place.at	go.up.PL-1.S

（カカンの）家に私は入った。

9/*7-8*

нэа́	пом	мо́ромахпо	тэ́ коро[30]	ана	я́йко-ра́нух-кара́	кусу́
nea	**pon**	**moromahpo**	**teekor[o]**	**ana[h](?)**	**yay-ko-raanuh-kara**	**kusu**
that	little	woman	very.much	EMPH(?)	REFL-to.APPL-love-do	because

その若い娘はとても（私を）愛していたので

10/*8*

Кака́н	ма́хпоhо	эе́ кара́:
Kakan	**mahpoo-ho**	**e-yee-kara:**
governer	daughter-POSS	about.APPL-say-do

カカンは娘に（そのことについて）言った。

---

[29] ピウスツキによる翻訳にこれに該当するところはないように思われる。主語がカカンであることと、動詞に mah-「女性」を含むことから、カレイの求婚を断ったいうことを示していると考えた。その後ろのкисѝは kii「する」に AHCI が付加された例だと思われるが、kii で表される出来事が何度も起こっていることを表していると考えられる。

[30] もともとは тэ́кор (э́の上にさらに長音記号)ではないかと思われる。書籍版では тт̃кор とある。14 行目も同様。英語版では tḗkor (Piłsudski 1990), tēkor (Majewicz (ed.) 2004)とある。

11/*9*

энэнэ́н	ан	пом	мо́ромахпо	нэ́hэ	нэа́ва
“enenen	**an**	**pon**	**moromahpo**	**nee-he**	**<u>ne-a-wa</u>**
like.that(?)	exist.SG	samll	woman	COP-NMLZ	COP-PERF(?)-and

「そのように（？）小さい娘なのに

12/*9-10*

hэма́та	кусу́	эн-ан		пом	капа́риу	эра́нун-иhи́[31]	hэтан ана[2]?
hemata	**kusu**	**en[e]**	**an**	**pon**	**kapariw**	**e-raanup-ihi**	**<u>hetan[e]ana</u>?”**
what	for	like.that	exist.SG	small	flatfish	2.A-love-POSS	Q

どうしてあのような小カレイ男をお前は愛しているのか？」

13/*10*

Нах	эе́ кара́.	Нэ́ва ка́йки
nah	**e-yee-kara.**	**nee-wakayki**
QUOT	about.APPL-say-do	COP-but

と（娘に）言った。けれども

14/*11*

нэа́пом		мо́ромахпо	пон	капа́ри	о́хкаё	тэ́ коро[32]	ра ́ну[33].
nea	**pon**	**moromahpo**	**pon**	**kapari[w]**	**ohkayo**	**teekoro**	**raanu[h].**
that	small	woman	small	flatfish	man	very.much	love

その小さな娘は小カレイ男をとても愛していた。（三人称語りに戻る）

15/*12*

Тай-	син-ан-то-	та	сойбэ́ка		хорокéупо	ита́х	háy	ан:
tay(<tan)	**sin[e]antoo**	**ta**	**soy**	**peeka**	**horokewpo**	**itah**	**haw**	**an.**
this	oneday	at	outside	through	man	speak	voice	exist.SG

ある時、（家の）外で男が話す声がした。

---

[31] эра́нуп-иhи́の誤植。英語版では eránupihí とある。
[32] 註 34 参照。書籍版では тѣ̃коро。英語版では tḗkoro (Piłsudski 1990), tēkoro (Majewicz (ed.) 2004)とある。
[33] 書籍版では pã́ну とある。英語版では ránu。

16/*13*

"по́н	капа́ри	о́ккаё	анаси́нке,"	нах	ан	ита́к	háy.
“pon	**kapari[w]**	**ohkayo**	**an-asinke.”**	**nah**	**an**	**itak[34]**	**haw.**
small	flatfish	man	1.A-push.out.SG	QUOT	exist.SG	speak	voice

「小カレイ男よ、私が出す」と話す声（がした）。

17/*14*

Нэ а́мпе[35]	кусу́	пом[36]	капа́ри	о́ккаё	аси́н.
neanpe	**kusu**	**pon**	**kapari[w]**	**ohkayo**	**asin.**
that	because	small	flatfish	man	go.out.SG

そのため、小カレイ男は外に出た。

18/*14-15*

" Птура́[37]	ни́нахци	кусу́",	нах	е-си.
“tura	**niina-hci**	**kusu”**	**nah**	**yee-si[38].**
togethr.with	gather.firewood-PL	will	QUOT	say-PL

「一緒に薪取りに行こう」と（二人は）言った。

19/*15-6*

Нэ а́мпе	кусу́	турахци́,	синэ́нупури́	оикасьтэ́[39],	
neanpe	**kusu**	**tura-hci,**	**sine nupuru**	**o-ika-[h]s[i]**	**te[h],**
that	because	go.together.with-PL	one mountain	at.APPL-go.over-PL	and

そのため、連れ立って行った。（二人は）ある山を越え、

20/*16-17*

синэ́	исё̆	нукарохци́[40];	ця́рha	о́ннэ
sine	**iso**	**nukara-hci.**	**car[a]-ha**	**onne**
one	bear	see-PL	mouth-POSS	place.to

一頭のクマを（二人は）見た。その口に、

---

[34] 樺太の大部分の地域で母音が後続しない限り-p, -t, -k は現れないが、ここでは ита́к (itak) となっている。実際、ピウスツキの他の資料でも itak というような例がある。実際には itaku のような語形で、母音が弱まって itak のように聞こえたのかもしれない。荻原 (解説)・丹菊 (翻刻・訳註)（2001）において itaku という語形がしばしばみられる。

[35] Pilsudskij (2002) インターネット版では Нэ а́лене となっているが、書籍版に従って Нэ а́мпе にした。

[36] 英語版でも pom とある。後続する子音が k であるのに、m となっている理由は不明である。

[37] 語頭の П は翻刻ミスだろうか。文法上 У(u)であることが期待される。英語版では Turá となっている。

[38] yee に(a)hsi が付いているのは二人が言ったことを表しているのだと考えられる。

[39] なぜか Majewicz (ed.) (2004) では cikas となっているが、o を c と読み間違えたものだろう。

[40] нукарахци́の誤記。英語版でも nukaraxcí である。

21/*17*

пон	капа́ри	о́ккаё	исо́	цяра́	о́ннэ	оцинаси́[41].
pon	**kapari[w]**	**ohkayo**	**iso**	**cara**	**onne**	**ocipa-[h]si.**
small	flatfish	man	bear	mouth(POSS)	place.to	throw-PL

小カレイ男はクマの口に向かって投げられた。

22/*18*

Нэ а́мпе	кусу́	о́ккара[42]	пониҥэ́[3]-	ани́	исо́	писе́	эку́си кара́,
neanpe	**kusu**	**ohkari**	**poni-he**	**ani**	**iso**	**pise**	**ekusikara,**
that	because	tale?	bone-POSS	with	bear	stomach	piarce(?)

そのため（小カレイ男は）トゲ（？）で胃袋を刺した（？）。

23/*19*

нэя́	исо́	хурэ́ки коро́[4],	цисе́	охта́	сан.
neya	**iso**	**hurekikoro[43].**	**cise**	**ohta**	**san.**
that	bear	die	house	place.at	come.down

そのクマは死んでしまった。（カレイ男は山から）家に下りて行った。

24/*19-20*

Кака́н	ма́хпоho	пон	капа́ри	о́ккаё	тура́	усамахци́;
kakan	**mahpoo-po**	**pon**	**kapari[w]**	**ohkayo**	**tura**	**u-sam-ahci[44].**
governer	daughter-POSS	small	flatfish	man	together.with	REC-marry-PL

カカンの娘は小カレイ男と結婚した。

25/*20-21*

маци́	тура́	исо́	кам	се-ци,
mac(<mat)-i	**tura**	**iso**	**kam**	**see-ci.**
wife-POSS	together.with	bear	meat	carry.on.the.back

妻とクマの肉を背負った。

---

[41] оцинаси́の誤植。ここで用いられた複数標識 AHCI に関しては本稿 3.2 参照。
[42] 英語版では oxkari で、ピウスツキによる註（本節末尾参照）でも О́хкари とあるので、ohkari とした。ここは「尾」が期待されるが、『アイヌ語方言辞典』によれば「しっぽ」は ohcara,-ha〜-ihi(獣の) ; sarakuh,-pihi(魚の)」（樺太、服部 (編) 1960: 820）とあるように、ohcara(ha), ohcari(hi) の語形がある。
[43] なぜかピウスツキによる註（テキストの末尾に訳出）では hurekoro となっている。似た語彙に hurehne がある。南方のアイヌは hurehne をクマが死ぬときに用いるが、北方のアイヌでは犬に関して用いられるという（Dobrotvorskij 1875: 53, 66）。また、hurehkoro という語彙も用いられている（北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局文化・スポーツ課 (編) 2007: 122）
[44] usam のような相互動詞には複数標識 AHCI が付加されることがほとんどである。しかし、相互接頭辞 u-が付加されていない sam の場合には AHCI は付加されない（複数人が sam する場合を除く）。

26/*21*

поро́	су-	а́ни	кам	сукехци́.
poro	**su**	**ani**	**kam**	**suke-hci.**
big	pot	with	meat	cook-PL

大きな鍋で肉を（二人は）料理した。

27/*21-22*

Пон	капа́ри	о́хкаё	му́ндзиринhэ[45][5]	кам	э тах-кара́.
pon	**kapari[w]**	**ohkayo**	**muncirip[e]-he**	**kam**	**e-tah-kara.**
small	flatfish	man	close.relative-POSS	meat	with.APPL-invite-do

小カレイ男は親類を肉で（宴会に）招いた。

28/*22-23*

Ма́хпоhо	ира́нупи́ке[6]		иа́мах ка́нтэ[46]	ана́нах	ка́йки
mahpoo-ho	**i-raanup**	**iike**	**i-omahkante-an**		**anahkayki**
daughter-POSS	1.O-love	and	1.O-be.ashamed(?)-IND.S(?)		although

「娘が私を好きになると、私は恥ずかしく思われたけれど

29/*24*

анаhу́нке,	исо́	сапа́	руй-ру́е	анки́-рэ[7],
an-ahun-ke,	**iso**	**sapa**	**ruyruye**	**an-kii-re.”**
1.A-.enter-CAUS.SG	bear	head(POSS)	stroke	1.S-do-CUAS

私は（自分の家に）入らせ、クマの頭をなでさせる」（と小カレイ男は言って）

30/*24*

ма́циhи	эутэ́х-кара́[47].
mac(<mat)-ihi	**e-uteh-kara.**
wife-POSS	for.APPL-use.someone-do

妻を使いに行かせた。

---

[45] му́ндзирипhэ の誤植かと思われる。

[46] ио́мах ка́нтэ の誤植。英語版では iómax kánte となっている。33 行目の ано́мах ка́нтэ からも omahkante という動詞であることが分かる。26 行目でも omahkante がでてくるが、管見の限りこの物語以外にはこの語彙は見当たらない。ピウスツキはこの部分を сильно мне совестно「私は大いに恥じている（筆者和訳）」としている。

[47] 英語版では euték-kará となっている。

31/*25*

Кака́н	hókho	цисé	(õ)та	ahýп　áнhи-	нэ áмпэ
kakan	**hok[o]-ho**	**cise**	**(o[h])ta**	**ahup-an-[i]hi**	**neanpe**[48]
governer	husband-POSS	house	(place)at	enter.PL-1.S-NMLZ	TOP

カカンは「夫の家に私が入ると、

32/*25-26*

яй	икора́мо пи́хи[49]	ка́йки	ан эра́мусь кари́;
yay	**i-ko-ramop(?)-ihi**	**kayki**	**an-eramuskari.**
just(?)	1.O-to.APPL-think(?)-NMLZ	even	1.S-not.know

ただ（？）私に対してどう思うのかも分からない。

33/*26-27*

рэ́нкайнэ	анhи́	ано́мах ка́нтэ,	нэа́ва
renkayne	**an[i]hi**[50]	**an-omahkante,**	**ne-a-wa”**
much	sir(?)	1.S-be.ashamed(?)	COP-PERF(?)-and

ひどくあなたのことを私は恥ずかしく思っているのだ（？）」

34/*27*

нахhá	ко́коhо-	онэ́	е	кора́м пи́рика-си́.
nahha	**koko-ho**	**o[n]ne**	**ye**[51]**.**	**ko-ram-pirika**[52]**-[h]si.**
QUOT	daughter’s.husband	place.to	say	to.APPL-heart-good-PL

と（言ったと妻は？）婿に言った。（小カレイ男と）みんなが仲直りした。（と妻は言った[53]）

35/*27-28*

Пон	ка́пари-	о́хкаё	маци́	тура́	кота́н hy	о́ннэ	хоси́би	кусу́,
Pon	**kapari[w]**	**ohkayo**	**mac(<mat)-i**	**tura**	**kotan-[u]hu**	**onne**	**hosipi**	**kusu,**
small	flatfish	man	wife-POSS	together.with	village-POSS	place.to	return	for

小カレイ男は妻とともに村へ帰るために

---

[48] 動詞-NMLZ neanpe で「～したら、～したところが」の意味（藤山 (口述) 村崎 (編) 2010: 付録 17）。
[49] Piłsudski (1990: 30) では пи́хи にあたる部分がない。
[50] Piłsudski (1912: 190)で an(i)hi が二人称敬称として使われた例があるので、ここでは「あなた」とした。
[51] 発言した主体が分からない。もしかすると妻となったカカンの娘が言ったのかもしれない。というのも、ピウスツキによる原註［7］には、妻が、親戚たちが夫のもとへ来ることを拒んでいることを隠し、親戚が到着しない別の理由を示している、とあるからである。
[52] 金田一（1913: 57）には「u-ko-rampirika,〔形〕仲ガヨイ，親シイ.」（uko-は共同接頭辞）とある。
[53] 原註［7］の記述に従うと、和解したというのは妻が付いた嘘である。

36/*28-29*

поро́	цисьа́ни	ирýра	-утара́	ива́н-ни́у	ирýра,	
poro	**cis**	**ani**	**i-ruura**	**utara**	**iwan-(n)iw**	**i-ruura.**
big	ship	with	APASS-carry	PL	six-peole	1.O-carry

大きな舟で漕ぎ手 6 人が私たちを運んだ。

37/*29-30*

мóромахпо	яя́	айн(у)	э́нко	ципó;
moromahpo	**yay-aa(?)**	**aynu**	**enko**	**cip-oo.**
woman	simply-sit	man	half	ship-row

女は座った。男の半分が舟を漕いだ。

38/*30*

пон	капа́ри	óхкаё	кота́нhу	оттá[54]	хоси́бихци,
pon	**kapari[w]**	**ohkayo**	**kotan-[u]hu**	**ohta**	**hosipi-hci.**
small	flatfish	man	village-POSS	place.at	return-PL

小カレイ男は自分の村へ（妻と）帰った。

39/*30-31*

ма́хнэку	по,	óхкаё	по	турá	ту	hэка́ци	короси́,
mahneku[h]	**poo,**	**ohkayo**	**poo**	**tura**	**tu**	**hekaci**	**koro-[h]si.**
woman	child	man	child	together.with	two	child	have-PL

女の子と、男の子と、二人の子どもが生まれた。

40/*31-32*

пон	капа́ри	óхкаё	ки́нhэ[55],	óхкаё	пóho	эця́ськома карá,
pon	**kapari[w]**	**ohkayo**	**kii-p[e]-he**	**ohkayo**	**poo-ho**	**e-caskoma-kara[56].**
small	flatfish	man	do-NMLZ-POSS	man	child-POSS	about.APPL-teach-do

小カレイ男は仕事を男の子に語り伝えた。

---

[54] охтáではなく оттáとなっている。英語版では oxtáとある。
[55] ки́пhэ の誤植かと思われる。英語版では kíphe である。
[56] 註 14 参照。

41/*32-33*

ма́хнэку	ки́пэ-	нэ а́мннэ[57]	ма́хнэку	по́ho	эця́ськома кара́;
mahneku[h]	**kii-pe**	**neanpe**	**mahneku[h]**	**poo-ho**	**e-caskoma-kara.**
woman	do-NMLZ	TOP	woman	child-POSS	about.APPL-teach-do

女の仕事は女の子に語り伝えた。

42/*33*

пой	сока́н-	ох́каё	ма́циhи	ки́пэ-	нэ а́мпэ
poy(<pon)	**so[h]kan[a]**	**ohkayo**	**mac(<mat)-ihi**	**kii-pe**	**neanpe**
small	sculpin	man	wife-POSS	do-NMLZ	TOP

小カジカ男の妻は仕事を

43/*34*

ма́хнэкупо		эця́ськома кара́;	о́ннэр-	утара́	ойсамахци́[8],
mahneku[h]	**poo**	**e-caskoma-kara[58].**	**onner[u][59]**	**utara**	**oysam-ahci.**
woman	child	about.APPL-teach-do	old	PL	die-PL

女の子に語り伝えた。老人たちは亡くなった。

44/*34-35*

нэр	hэка́ци	утара́	вэ яй цисе́ коро,	пи́рика	ока́й	ки-си.
ner[oh](?)[60]	**hekaci**	**utara**	**wee(<u-e)-yay-cise-koro,**	**pirika**	**okay**	**kii-si.**
these	child	PL	REC-about.APPL-REFL-house-have	good	life	do-PL

その子供たちはそれぞれ家を持ち、良い暮らしをした。

45/*35-36*

Ма́хнэку	утара́	ки-си	а́мпэ	эуко вэ́бэкерэ
mahneku[h]	**utara**	**kii-si**	**anpe**	**e-uko-weepekere**
woman	PL	do-PL	NMLZ	about.APPL-COM-talk

女たちは仕事のことをみんなで語り合った。

---

[57] а́мпэ の誤植。Pilsudskij (2002) 書籍版では正しく ампэ とある。
[58] 註 14 参照。ここで女の子に女の仕事を教えたのは当然のことながら、母親であるカジカ男の妻であるが、男の仕事を伝えるべきカジカ男は行方不明となっている。
[59] Dobrotvorskij (1875: 226) に「老齢な、非常に年老いた」（筆者和訳）とある。
[60] нэр では何か分からないが、ピウスツキの訳で нэр (hэка́ци)に該当するのは эти дети「これらの子供たち（筆者和訳）」なので、neeroh「それら」ではないかと思われる。

46/*36*

ýтара	уми́нарэ,
utara	**e-u-miina-re,**
they	about.APPL-REC-laugh-CAUS

彼女らは笑いあった。

47/*37*

óхкай	утара́	ки	а́мпэ	ýтара-	е	эуми́нарэ,
ohkay[o]	**utara**	**kii**	**anpe**	**utara**	**yee,**	**e-u-miina-re,**
man	PL	do	NMLZ	they	say	about.APPL-REC-laugh-CAUS

男たちの仕事を彼らは言って、笑いあった。

48/*38*

а́йну	иси́ннэ	усóйта		цисé	ýтара	кара́,
aynu	**isinne**	**u-soy**	**ta**	**cise**	**utara**[61]	**kara,**
human	all	REC-outside	at	house	they	make

人々はみんな隣同士に家を建てた。

49/*38-39*

усóйра[62]		пи́рика	ока́й	ýтара	ки	ману́.	hэмака́.
u-soy	**ta**	**pirika**	**okay**	**utara**	**kii**	**manu.**	**hemaka.**
PEC-outside	at	good	life	they	do	HS	end

隣同士でよい生活を彼らはしたとさ。おしまい。

原注:

[1] (4) Какан (Kakan) ― カレイが結婚を承諾してほしいと思っていた娘の母親の名前[63]。

[2] (10) hэтан ана (hetan ana) ― 翻訳されず、疑問文の最後にのみ置かれる。

[3] (18) Óхкари понихэ (ohkari ponihe) ―胃と腸を傷つけるため、犬にも与えることが許されていない骨。カレイ、カジカ、コイの一種の骨のみが危険である。

[4] (19) Хýрэ-корó (hure koro)[64]（物語の中で）= рай (ray) = 死んだ。

---

[61] cise utara kara「家たちを作った」（名詞に付加される utara は無生物にも用いられる）とも解釈できるが、次の行の utara と同じく前方照応的に用いらえていると考え、「彼ら」とした。この utara の用法に関しては佐藤（1987）で扱われている。なお、佐藤（1987: 23）によれば、この修飾要素を伴わない utara が主語で用いられるほとんどの場合で、動詞に複数標識 AHCI が現れないという。

[62] усóйта の誤記だろう。英語版では uśójta とある。

[63] この部分は英語版にない。なお、この語に関しては註 9 も参照のこと。kakan は「太守」（知里 1948: 385）と訳されうるもので、この註はピウスツキの間違いかと思われる。

[64] 本文では хурэ́ки корó (hureki koro) とあるが、ここでは Хýрэ-корó (hure koro)となっている。

[5] (22) Му́ндзирибэ (munciripe[65]) ―それぞれ一人一人、妻の最も近い親族（舅、姑、妻の兄弟、妻の姉妹などの妻の血縁者)。

[6] (23) Иранупике (iranupike) = сонно инь конупуру (sonno in-konupuru) = （彼女が）私を強く愛したとき。

[7] (24) アイヌは夏にクマを殺すとき、その頭を住居（ユルタ）へ運び、そこで皆はアイヌ（人間）にするように、それ（頭）に挨拶をする。親戚たちはカレイのもとへもてなしに行くことを断ったので、妻は隠し、そして明らかに嘘をつきながら、彼らが到着しない別の理由を指し示した。[66]

[8] (34) Оисям (Oisam) =рай (ray) = 死ぬ。[67]

おとぎ話。多古恵 (Takoje) で記録。クスリコヤ (Kusurikoya)[68]という 19 歳の少女によって口述された。

謝辞

ロシア語の不明箇所に関して吉田睦先生、久保田俊樹氏にご教示いただいた。深く感謝申し上げる。また、本稿の一部となっている前稿の阪口（2018）を執筆するきっかけを下さった安田千夏さん、そしてそれに対してコメントしてくださった北原次郎太先生にも感謝申し上げる。なお、3.2 に関して中川裕先生からコメントを頂いているが、それに対する回答は今後の課題としたい。本稿に誤りがあれば筆者の責任である。

略号一覧

- 形態素境界／1 一人称／2 二人称／A 他動詞主語／APASS 逆受動／APPL 充当接頭辞／CAUS 使役派生接辞／COM 共同／COMP 補文標識／COP コピュラ／DESID 願望／DIM 指小辞／EMPH 強調／FIN 終助詞／HS 伝聞／IND 不定人称／NMLZ 名詞化辞／PERF 完了／PL 複数／POSS 所有接尾辞／Q 疑問／QUOT 引用／REC 相互／REFL 再帰／S 自動詞主語／SG 単数／TOP 主題

参考文献

浅井タケ（口述）・村崎恭子（編訳）（2001）『浅井タケ口述 樺太アイヌの昔話』草風館.
浅井亨（1972）「加賀屋文書の中のチャコルベ」『北方文化研究』6: 131-162.
知里真志保（1948）「樺太アイヌの説話」『民族學研究』12(4): 328-338.

---

[65] 知里（1976[1954]: 494）には munciripe, moncirupe（どちらも白浦の語彙で同じ意味だとある）があり「夫の父；夫の兄；夫の弟；夫の母；妻の兄」を意味するとある。服部 (編)（1964: 44）では配偶者の父親となっている。
[66] この部分は Majewicz (ed.) (2004) にない。
[67] この部分は英語版にない。
[68] 註 19 参照。

知里真志保（1973[1942]）「アイヌ語法研究―樺太方言を中心として―」『知里真志保著作集』3: 456-586, 平凡社.
知里真志保（1973[1944]）「樺太アイヌの説話（一）」『知里真志保著作集』1: 251-372, 平凡社.
知里真志保（1976[1954]）『知里真志保著作集』別巻Ⅱ, 平凡社.
知里真志保・山本祐弘（1973）「樺太アイヌの生活」『知里真志保著作集』3: 145-209, 平凡社.
Dobrotvorskij, M. M. (1875) *Ainsko-Russkij Slovar'* Kazan.
Etter, C. (1949). *Ainu Folklore: Traditions and Culture of the Vanishing Aborigines of Japan*. Chicago: Wilcox & Follett Co.
服部四郎・知里真志保（1960）「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24(4): 307-342.
服部四郎（編）（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
北海道教育庁生涯学習部文化課（編）（2003）『平成 14 年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ生活技術伝承実態調査Ⅳ）』北海道教育委員会.
北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局文化・スポーツ課（編）（2007）『知里真志保フィールドノート(6)』北海道教育委員会.
藤山ハル（口述）・村崎恭子（編）（2010）『樺太アイヌの民話（ウチャシクマ）―ウェネネカイペ物語（3 編）―』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所.
金田一京助（1911a）「樺太アイヌの音韻組織（二）」『人類學雑誌』27(7): 401-410.
金田一京助（1911b）「樺太アイヌの音韻組織（三）」『人類學雑誌』27(8): 472-479.
金田一京助（1913）「樺太アイヌ語彙」山邊安之助（著）・金田一京助（編）『あいぬ物語』: 33-60, 博文館.
金田一京助（編）（1914）『北蝦夷古謠遺篇』（甲寅叢書, 第 1 編）甲寅叢書刊行所.
Kitagawa, J. (1950) Ainu Folklore: Traditions and Culture of the Vanishing Aborigines of Japan Carl Etter. *The Journal of Religion*, Volume 30: 232-233.
Majewicz, A.F. (ed.) (2004) *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski 3, Trends in Linguistics. Documentation* 15-3, Mouton de Gruyter.
村崎恭子（1979）『カラフトアイヌ語―文法篇―』国書刊行会.
村崎恭子（1989）『樺太アイヌ語口承資料』1（文部省科学研究費補助金研究成果報告書）, 北海道大学.
村崎恭子（2001）「B. ピウスツキ収録の昔話 11 編と民話 1 編」村崎恭子（編）『少数民族言語資料の記録と保存―樺太アイヌ語とニヴフ語―』: 91-135, 大阪学院大学情報学部.
中川裕（1998）「ペテルブルグ MAE コレクションのアイヌ語資料」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1: 67-109.
西川正雄ほか（編）（2001）『角川世界史辞典』角川書店.
荻原眞子（解説）・丹菊逸治（翻刻・訳註）（2001）「千徳太郎治からピウスツキ宛の書簡」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4: 187-226.

Ohnuki-Tierney, Emiko (1974) *The Ainu of the Northwest Coast of Southern Sakhalin*. Holt, Rinehart and Winston.

大貫恵美子（1979）「第二章 南樺太北西海岸のアイヌの生活」知里真志保・山本祐弘・大貫恵美子『樺太自然民族の生活』: 96-127, 相模書房.

Piłsudski, B. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.

ピウスツキ, B（1983）中川裕（訳）「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料・序文」『創造の世界』46: 101-119.

ピウスツキ, B（1983-92）「B･ピウスツキ／樺太アイヌの言語と民話についての研究資料＜1～30＞」北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会（訳）『創造の世界』46-84.

Piłsudski, B. (1990) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore Two*. Poznan.

Pilsudskij, B. (2002) *Fol'klor Sahalinskih Ajnov*, Južno-Sahalinsk.

ピウスツキ, B（2018）井上紘一（訳）「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」高倉浩樹（監修）・井上紘一（訳編・解説）『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌―二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルタ』: 205-258, 東北大学東北アジア研究センター.

阪口諒（2018）「カレイなる男の物語」『月刊シロロ』4 月号、アイヌ民族博物館.

阪口諒（2019a）「樺太アイヌ語における人称のクラスと主格目的格人称接辞」『北海道言語研究』17: 1-18.

阪口諒（2019b）「樺太アイヌのオイナ―B.ピウスツキと C.エッターによる英訳テキスト―」『北海道民族学』15: 35-44.

Sato, T.（1985）"The First Person Objective Affix *in*- in the East Coast Dialects of Sakhalin Ainu". In: Executive Committee of the International Symposium(ed.) *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*: 157-167, Hokkaido University.

佐藤知己（1987）「アイヌ語樺太方言の‘Utara’について」『ウエネウサラ』創刊号: 20-26.

田畑博子（1995）「『エイ女房』譚の構造」野村純一（編）『昔話伝説研究の展開』: 119-135 三弥井書店.

多紀保彦・河野博・坂本一男・細谷和海（2005）『新訂 原色魚類大圖鑑』圖鑑編、北隆館.

田村将人（2015）「樺太アイヌのこの 150 年間―安部洋子さんの家族の歴史―」安部洋子（著）・橋田欣典（編）『オホーツクの灯り 樺太、先祖からの村に生まれて』: 227-248, クルーズ.

丹菊逸治（2002）「サハリンアイヌの散文説話 tuytah について」『口承文芸研究』25: 37-48.

丹菊逸治（2013）「サハリン口承文学の地域差」『口承文芸研究』36: 54-70.

虎尾ハル (伝承)・志賀雪湖（解題）（1988）「パナンペ噺」『アイヌ文化』13: 25-31.

津曲敏郎（2013）「B.ピウスツキのウイルタ語民話資料について」沢田和彦（編）『ポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』（埼玉大学教養学部リ

ベラル・アーツ叢書 5）: 97-112, 埼玉大学教養学部・文化科学研究科.
Tsumagari, T. (2014). Remarks on the Uilta folktale text collected by B. Pilsudski.『北方人文研究』7: 83-94, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
津曲敏郎（2014）「ピウスツキ採集のウイルタ語民話テキスト」『北方言語研究』4: 213-231.
山邊安之助（著）・金田一京助（編）『あいぬ物語』博文館.

A Sakhalin Ainu Folktale Text by B. Piłsudski: "A Flatfish Man and a Sculpin Man"

Ryo SAKAGUCHI
Graduate school of Humanities and Social Sciences, Chiba University

Bronisław Piłsudski (1866-1918), a Polish ethnologist, collected many Ainu materials during his stay in Sakhalin. His materials are valuable both from ethnological and linguistic viewpoints. In the present paper, the author takes up Tuita 3 of Pilsudskij (2002). This tale is regarded as a *tuytah* 'fairy tale', and in this tale, fishes act and live like humans, although the tale also reflects how these fishes live. The same story was recorded by Etter (1949) from another speaker about 30 years later. Similar motifs are also found among the Nivkh people who live in Sakhalin. The author maintains that these texts should be studied in comparison with other sources. For this purpose, we will make some remarks on the contents of the story, discuss some linguistic issues, and reconstruct the text in phonological transcription with morphological analysis and Japanese translation.

A Flatfish Man and a Sculpin Man

There was a small flatfish man and a small sculpin man. The flatfish man heard that the daughter of Kakan (<khan, governor) in the offshore country was so beautiful. So he wanted to get married with her and went to the offshore country.

When the young woman came down to the beach to scoop saltwater, The flatfish got inside the dipper and was thus brought to Kakan's house. The young woman fell deeply in love with him. However, Kakan disliked the flatfish man.

One day, a stranger came out of the house, and they went to a mountain to get firewood. Then, they happened to meet a bear, and the flatfish man was thrown into the bear's mouth. The flatfish man stabbed the bear's stomach with his tail bone and killed it.

Now, the flatfish man and Kakan's daughter are married, cooking the bear meat and inviting Kakan. The flatfish man returned to his village with his wife. He told their sons what men should do, and his wife told their daughters what women should do. They passed away, and their children all lived happily ever after.

（さかぐち　りょう・千葉大学大学院人文公共学府）